

エマソンと奴隸制廃止運動

松島欣哉

はじめに

十九世紀前半の奴隸制廃止運動において、声高に奴隸制を非難した主要な作家たちは、詩人のウイリアム・カレン・ブライアント、ジョン・グリーンリーフ・ホイッティアーとジェイムズ・ラッセル・ローウェル、超絶主義者のラルフ・ウォルドー・エマソンとヘンリー・デイヴィッド・ソローたちであった。特に後者の二人は、無条件に奴隸制廃止運動と深く係わっていたような印象を与えるが、実際は曲折があった。「市民の不服従」(1849)において、メキシコへ侵略戦争をしかけ、奴隸制を容認するアメリカ政府を糾弾したソローでさえ、ウォールデン湖畔に住み初めて三日目の、一八四五年七月六日付けの「日誌」には、「人々が黒人奴隸制という卑劣な形態に注意を向けるほど軽薄になれるとは驚きだ。「北部と南部の」両方で我々を服従させ

る、鋭敏で狡猾な主人がたくさんいるとどうなの」(P. 156)と書き込み、南部の奴隷制より、まず制度や物など外部の奴隷にならないことに意を用いるべきだ、と言っている。

エマソンにおいては、奴隷制廃止運動などの社会改革運動とどのように係わるかということ、複雑で微妙な問題であった。本論の目的は、エマソンの人種的・社会的階級意識が、この問題と係わる中でどう変化したかを考察することである。

一 奴隷制に関する初期の考え

エマソンが奴隷制廃止運動に関し公に発言を始めるのは、運動がかなり進展してくる一八〇〇年代半ばからのことであるが、日誌の中では、ごく初期の段階から奴隷制に関する言及はある。早くも一八二二年十一月には、「全て人間は生まれながらに平等である」という独立宣言の言葉は「都合のよい仮説」(JMN 2: 42)であると記し、また、ヨーロッパ人・ムーア人・タタール人・アフリカ人に、「自然はそれぞれに違った程度の知性を与えていて、その間の障壁は乗り越えられない」(43)と述べ、白人の人種的優等性を主張する当時の言説を容認している。しかし、他方、

この「人間に自由意志があるかという」議論のどちら側に立つ者であろうと、人間が自分の同胞を強制的に奴隷にしてよいという理論に対しては、わずかに話題とされるだけでも、大いに憤慨するに相

違ない。(中略)自分が得ている自由を仲間からもぎ取ることは、明白に不遜な不敬の一撃だ。(38)

と、アメリカ精神の根幹である自由の観点から、奴隷制そのものを激しく批判している。

一八〇〇年代前半は、アメリカ全土でキリスト教の信仰回復運動、いわゆる第二次「覚醒運動」が興り、そこから様々な社会改革運動が広がっていった。奴隷制廃止運動もその一つであった。この運動は一八三〇年代に組織化され、活発な活動を繰り広げる。このような状況の中、ボストン第二教会の牧師であったエマソンは、一八三二年、ユニテリアン派の同僚であり、奴隷制廃止運動の指導者でもあったサミュエル・ジョゼフ・メイに、反奴隷制の説教をすることを許した。一八三五年には、ボストンの宗教界の指導者の一人であり、エマソンの師ともいえるウィリアム・エラリー・チャニングが、「奴隷制」と題する書物を出版した。チャニングはこれの中で、人を財産として所有することは「造り主に侮辱を加えることだ」(26)と奴隷制を非難するものの、「この国においては、奴隷所有者の州の力以外のどんな力もこの悪弊を取り除くことはできない」(107)と、奴隷制の廃止をおこなえるのは奴隷と奴隷所有者のみであると述べ、南部白人の「道徳感情」(79)の向上に期待した。また、北部人がなすべきは「公の資格としてではなく、個人の資格で、奴隷制廃止のために有効なあらゆる影響力を行使すること」(136)だと言った。チャニングは、個人の人間性の向上が社会全体の向上に繋がると考え、集団的行動を嘉としない。エマソンは一八三六年五月四日付けの日誌の書き込みで、チャニングの「奴隷制」を「完璧に本物の現代の仕事」(JMN 5: 150)の一つに数え上げ、チャニングの考えを支持

したのだった。

エマソンはまだ奴隷制に関して公の発言を控えているが、奴隷制に対する嫌悪感は募っている。一八三五年二月二日付けの日誌の書き込みには、次のように記している。

私の意見などおそらく取るに足りないが、私が習い覚えた言葉の一言半句でも、奴隷を所有する農園主を擁護するために口にしたくはない。(中略)だから、私は今までのところ、農園主の喉笛をかき切ってやるのも気が進まないし、彼を弾劾するのも差し控えているが、夢の中であろうと、気が狂ってあらぬことを口走ろうと、奴隷商人や奴隷所有者を弁護する一言半句でも口にするような恥ずかしい真似はしないように、神に祈っている。(JMN:5:15)

また、一八三七年四月十日付けの書き込みには、「奴隷制は人間を猿に変える制度だ」(Q95)とも書き記している。

しかし、黒人奴隷の置かれている状態に対して、エマソンは心から同情しているようには思えない。たとえば、妻のリディアンがアフリカ西岸と西インド諸島を結ぶ、奴隷貿易航路で運ばれる黒人奴隷たちの恐怖を声高に嘆いたとき、一八三七年十月一日付けの日誌の書き込みに、彼は次のように記した。

彼らの恐怖は確かにひどい。しかし、彼女のような者にはこのような厳しい試練は訪れない。愚鈍な者たちや野蛮な者たちに訪れるのだ。やつらにとっては、恐ろしいものではなく、前の苦しみより

少しばかりひどいものにすぎない。共食いの戦争を、悪臭のする船倉と取り換えたただけ。(382)

また、一八三八年十月二十九日付けの書き込みには、「私には『なぜ神は奴隷制を許しているのか』といったわれわれがする質問は不躰であることも分かっている。そのような質問は既にわれわれの中で解答済みだ』(JMN 7:123)と、神学上の理論(おそらく悪の存在の正当化論)から、奴隷制の存在を容認していると取れる言葉を記している。

二 奴隷制廃止運動とのかかわり

しかし、エマソンは次第に奴隷制廃止運動と深くかかわっていくようになる。以下、多数の資料を渉獵し、奴隷制廃止運動にかかわったエマソンの姿を明らかにした、レン・グージョンの『美德の英雄』(1990)を参考にしながら、エマソンと奴隷制廃止運動とのかかわりを概観する。

エマソンが奴隷制を主題に公に発言したのは、一八三七年十一月にコンコード第二教会で行った講演であった。このときの原稿は残されておらず、われわれは『日誌と備忘録』の書き込みとジェイムズ・エリオット・キャボットの『ラルフ・ウォルドー・エマソンの想い出』(1887)に書かれた引用から、その内容を推測するしかない。この講演に関する備忘録には、「この問題におけるわれわれの義務は正邪をはっきりさせることだ。そうすれば、この問題で投票を求められたときにはいつでも、問題から逃げたり、いい加減に扱ったりしない。無知になら

ず、投票において理性と正義の行為ができる」(JMN 12: 154)と記している。グージョンは、この講演の主眼は表現の自由であったろうと推測している(39)。

一八三七年から一八三八年にかけての冬、ボストンで行った講演を基に書かれた「勇壯論」(1841)では、一八三七年十一月七日、イリノイ州オールトンで奴隷制反対運動を行っていたイライジャ・ラヴジョイが暴徒に襲われ死亡した際に、日誌に書き込んだ所感を利用し、「勇敢なるラヴジョイが、自由に発言し意見を言う権利のために暴徒の弾丸に胸を差し出し、死んだ方がましなときに死んだのは、ついこの間のことだ」(CW 2: 262)と書いた。しかし、エマソンは十一月二十四日付けの日誌の書き込みには、「人道と自由に発言し意見を言う権利のために」(JMN 5: 437)と書いていたのだ。彼は「勇壯論」では、ラヴジョイの死の原因が奴隷制反対という人道的大義であったことを意図的に切り捨て、言論の自由の問題へと敷衍しているように思える。このころはまだ、奴隷制反対運動とは一線を画しておきたいという意図があったのであろう。

一八三〇年代後半から四〇年代前半にかけて、チャニング以外にも、シオドアー・パーカーやウイリアム・ヘンリー・ファーンズといった、エマソンと親交の深い牧師たちが、奴隷制廃止運動に加わっていくなか、エマソンも一八四四年八月一日にコンコードにおいて、「イギリス領西インド諸島における奴隷解放についての演説」と題する講演を行い、奴隷制廃止運動へ一歩を踏み出した。これは、イギリス領西インド諸島の黒人奴隷が解放されて十周年を祝う会合でおこなった講演で、コンコード反奴隷制婦人会の要請に応じて行ったものである。

エマソンは、先に引用した日誌の書き込みに見られるように、これまで奴隷の実情を全くと言つていいほど知らなかつた。彼はこの講演では、黒人奴隷の実情と彼らの解放の歴史を綴つた主に二つの資料から、奴隷のぞつとする実情を示す描写を引用し、彼らに深い同情を示している。しかし、エマソンは冒頭近くで、「とがめ立てする発言や、できることなら、憤慨の発言は、ことごとく差し控えましょう」(CW 11:100)と述べ、奴隷保有者を直接非難することは避け、アメリカでもイギリスと同じように、高邁な精神を持つ多くの人々の合意による立法をとおした、奴隷解放の可能性に希望を託した。エマソンは、奴隷制の問題は、単に個人の道徳的向上だけでは解決されず、公的、つまり政治的にしか解決できないという認識を示したのである。個人の改革と社会の改革との間に一線を画してきた彼にとって、これは大きな認識の変化であつた。またもう一つ重要な意識の変化が起こつた。彼は通読した資料から、解放時の黒人奴隷の穏やかな対応を知り、「黒人種は、他のどの人種にもまして、急速な文明化を受け入れられる」(142)との認識を得た。つまり、彼がこれまで抱いていた黒人の劣等性という偏見が、少し崩れたのであつた。

エマソンの奴隷制に対する関心はそのまま保たれたが、奴隷制反対運動にどこまで関わるかという問題は、なお彼を悩まし続けた。しかし、彼を決定的に奴隷制反対運動に巻き込む事件が起こる。一八四八年二月、アメリカとメキシコとの間の戦争が終結し、現在のカリフォルニア州からコロラド州にまたがる広大な土地をメキシコから割譲されると、アメリカ議会では新しい領土に奴隷制を導入することの是非をめぐる議論が巻き起こつた。一八五〇年一月、ケ

ンタッキー州選出の上院議員ヘンリー・クレイが、「一八五〇年の妥協」として知られるいくつかの妥協案を提出すると、同年三月七日、マサチューセッツ州選出の上院議員ダニエル・ウェブスターは、妥協案の一部である「逃亡奴隸法」に賛成演説をおこなった。これに対しマサチューセッツ州では、奴隸制廃止論者を中心に非難が巻き起こったが、一方、ボストンの富裕層を中心とする支配階級からは称賛の署名が寄せられた。このような対立の中、「逃亡奴隸法」は一八五〇年九月に成立した。

この間エマソンは、かつては称賛していたウェブスターの道徳的墮落を非難する言葉を何度も日誌に書き込んでいたが、一八五一年四月三日、ボストンでトマス・シムズが逃亡奴隸として逮捕され、ジョージア州に送還される事件が起こると、遂に五月三日、コンコードの市民に向けて「逃亡奴隸法」と題する演説を行った。冒頭、逃亡奴隸法のもたらした閉塞感と恥辱感を次のように言い表した。

今われわれは息が詰まる思いがします。破廉恥な評判が流布しているからです。私は新しい体験に直面しています。朝起きると心身の苦痛を感じ、それは一日中私に付きまといまいます。元をたどると、それは、マサチューセッツ州に降りかかり、風景の美しさを奪い、時々刻々日の光を閉ざす、あの不名誉の忌まわしい記憶にたどり着きます。(CW 11: 179)

「逃亡奴隸法」でエマソンは、ウェブスターをはじめとする政治家や法律家の不道徳性を批判し、憲法よりも「より高い法則」(190)に従うことを唱道する。そして、「この国の運命は偉大

であり自由主義にあります。ですから、気高く統治されねばなりません」(205)と述べ、道徳性に優れた指導者の出現に期待を寄せる。奴隷制廃止に関して、イギリスの先例にならない、奴隷の買い上げによる廃止を提案するだけであったが、奴隷制廃止論者からは、彼が自分たちの陣営にいることを公式に宣言したものととして歓迎された。

この直後、自由土地党がエマソンの友人であるジョン・ゴードラム・ポールフリーを立てて国会議員選挙を行うと、エマソンはボストンをはじめとする各地で、「逃亡奴隷法」の演説を行った。しかし、日誌には奴隷制の問題について非難の言葉をしばしば書き込んだものの、その後、彼は公の発言は控えた。

一八五四年一月二十三日、イリノイ州選出の上院議員ステイヴン・ダグラスが、カンザス、ネブラスカ両準州を合衆国に組み入れる際に、奴隷州となるか自由州となるかは住民の決定による、とする法案を提出した。これに対し、奴隷制廃止論者たちや南部の政治的支配を嫌う北部の政治家たちが、反対に立ち上がる。エマソンはウエブスターが逃亡奴隷法に賛成演説をしたと同じ三月七日にニュー・ヨークで、「逃亡奴隷法」と題する演説を行った。この中でエマソンは、公の話題を論ずるのは自分にはふさわしくないとことわりながら、まず、ウエブスターを「道徳的感受性」(CW 11: 223)に欠け、「人道と正義の側」(226)に立たず、「虐待と抑圧と混沌の側」に立った、墜ちた政治家の代表として断罪する。そして、「独り立ちできる人間だけが社会を作る資格がある」(235)故に、腐敗した政治家や法律への依存ではなく、「神への依存」(236)そのものである「自己信頼」に依拠した、個々人の道徳意識の向上を呼びかける。最

後にエマソンは、「反奴隷制協会に敬意を表する」(24)。

一八五五年の一月から二月にかけて、エマソンは「アメリカの奴隷制」と題する講演を六回行った。この中で彼は、「偉大な大衆と偉大な目的に向かって行動することは、とても心地よいことです。例えば、奴隷制の即刻あるいは漸進的廃止などのように」(21:2:13)と、奴隷制廃止論者たちにエールを送った。

一八五四年五月三十日に成立したカンザス・ネブラスカ法の下、カンザス準州が「流血のカンザス」と呼ばれる、奴隷制支持派と奴隷制反対派が争う状況の中、一八五六年五月二十二日、南部を非難する演説を行ったマサチューセッツ州選出の上院議員チャールズ・サムナーが、サウス・カロライナ州選出の下院議員プレストン・ブルックスに殴打される事件が起こった。五月二十六日、コンコードで抗議集会が開催されると、エマソンは「サムナー氏への襲撃」と題する演説を行い、「われわれは奴隷制を排除するか、さもなければ、自由を排除しなければならぬ」(CW II: 24)と、アメリカの置かれている状況が危機的状況であることを訴えた。さらに九月十日には、ケンブリッジで「カンザスでの情勢についての演説」と題する、激越な講演を行った。

一八五九年十月十六日、カンザス州で奴隷制廃止運動を行っていたジョン・ブラウンが、ヴァージニア州ハーパーズフェリーの武器庫を襲撃する事件が起こった。このときエマソンは、ブラウンの行動を非難する声が高まる中、後に「ジョン・ブラウン隊長のための弁護」(1860)として出版されるソローの演説に劣らずブラウンの高潔さを称賛する、「ジョン・ブラウン」と題

する演説を、十一月十八日にはボストンで、翌年一月六日にはセイラムで行った。エマソンの奴隷制廃止および自由の擁護に対する姿勢は、南北戦争(1861-1865)の間も、終始変わらなかつた。

三 奴隷制廃止運動とエマソンの人種および階級意識

エマソンの改革運動全般に対するスタンスは、チャニングと同じように個人主義的であつて、個人の内面の改革を第一と考えていた。ダニエル・ウォーカー・ハウによれば、ユニテリアン派の考えでは、個人の精神面での向上は個人の努力に依存しているが、社会の改善は「個人の救済の副産物」(278)にすぎないのである。一八四二年十二月二日に行った「時流についての講演」でエマソンは、奴隷制廃止運動について、

奴隷制廃止論者がただ奴隷の状況だけを目標とするとき、彼らの闘争は何とつまらなく見えることだらう。奴隷の宗教的感情をほんのすこし高めてみよ。そうすれば、彼はもはや奴隷ではなく、諸君が奴隷となる。彼は謙虚な気持ちで自分の優越性を感じ、また、彼の嘆かわしい状態は、次第に消えゆく些細なことであると感ずるばかりでなく、諸君にも同じ感じを抱かせる。彼は主人の地位に就くのである。奴隷の受ける迫害を誇張することは、若い人々の特徴となっている。(CW1:280-81)

と述べ、外的状況の改革のみを唱える者たちには共感を示していない。それと同時に、この段

階でエマソンは、奴隷制の問題を制度の問題ではなく、精神の問題として捉えようとしていることが窺われる。エマソンは奴隷制廃止論そのものに対しては、日誌の初期の書き込みから分かるように、以前から大いに賛成であったが、奴隷制廃止論者たちの姿勢に対して、疑念を抱いていたのだ。

一八四四年三月三日に行った「ニューイングランドの改革者たち」と題する講演の中では、禁酒運動や奴隷制廃止運動などの社会改革運動をする人々を指して、エマソンは次のように批判した。「われわれはこれらの弊害の一つの攻撃に熱心な人、特定の改革者に会うと、こう尋ねたくなる。「あなたが奉ずる一つの美德に対して、あなたはどんな権利を持つのでしょうか。美德はばらばらなものでしょうか」と(CW 3: 263)。この部分は一八四一年十二月の日誌の書き込みを利用したもので、そこでははつきりと、「われわれが奴隷制廃止論者あるいは特定の改革者に会うと」(JMN 8: 162 傍点筆者)と書いている。「ニューイングランドの改革者たち」は、穏健な奴隷制廃止主義者たちの集まりである、無抵抗主義協会の会員たちに行った講演なので、あからさまな非難を避けたにすぎない。また、一八四四年か四五年の夏から秋に書かれた日誌の書き込みでは、エマソンは奴隷制廃止運動の指導者たちを、「まったくもって忌まわしい輩で、退屈な話をする者たちや口先だけで立派な話をする者たちの最悪のパターンとして、誰もが必ず遠ざける」(JMN 9: 120)となじり、嫌悪感を露骨に示している。

エマソンを奴隷制廃止運動から遠ざけた別の理由は、彼の白人中心主義であろう。一八三四年十二月中旬の日誌の書き込みで、エマソンは次のように言った。

エマソンと奴隷制廃止運動

民主主義／自由はその根を以下の神聖な真実に持っている。つまり、誰もが自分の中に神性を備えた「理性」を持っているということ、あるいは世界の創造以来、「理性」の命ずるところに従って生きる人はほとんどいないが、すべての人間がそうすることができるよう創造されているということだ。(MN 4: 357)

この時点で、エマソンが「すべての人間」(all men)に、黒人や先住民を含めて考えていたかどうかは疑問である。

逃亡奴隷法が成立して数カ月たった、一八五一年五月から七月の間に書かれた日誌の書き込みの中で、エマソンは「白人側の道徳感情の欠如こそ私が遺憾とする不幸である。千人の黒人が隷従におかれていようと私には何でもない」(MN 11: 385)と断言している。このときのエマソンの関心は、白人の道徳性にあるのであって、決して黒人の置かれている不正状態ではない。さらに、一八五六年あるいは一八五八年の日誌の書き込みで、エマソンは「インディアンが絶滅するまでには、どれほどかかるのだろうか。それに黒人は？ そうなれば、人間と獣との間には威厳という何と恵み深い隔たりがあることか、と言えるようになるう」(MN 13: 54)と言い、先住民と黒人は人間(すなわち白人)と獣の中間に位置しているという、青年時代に表明した人種観をいまだ抱いていることを露呈している。グージョンは、エマソンが「奴隷制廃止運動に積極的に参加するのを拒んだ最大の理由は、黒人の劣等性に対する確信であった」(66)と指摘している。

それにもかかわらず、エマソンは奴隷制廃止運動へ深くかかわっていく。それには、当然ながら、彼のまわりの環境が大いに影響していたことが考えられる。少年期・青年期のエマソンに多大なる影響を与えた叔母メアリー・ムーディー、彼の弟チャールズ、および妻リディアンは、奴隷制廃止論者であった。またコンコードは奴隷制廃止運動の拠点の一つで、ソローの母親と姉妹ヤリディアンが創立メンバーに名を連ねた、コンコード反奴隷制婦人会は、一八三七年の設立以来活発に活動し、エマソンに奴隷制について発言することをしきりに求めたのだ⁽¹⁾。

だが、「忘まわしく有害な」(CW 11: 217)公の問題にはかかわりたくないという、生来の氣質を押し返したのは、第一には、彼の使命感であつたろう。一八三七年八月にハーヴァード大学で講演した「アメリカの学者」の中で、エマソンは「学者にとつて行動は副次的なものだ、しかし、不可欠のものでもある。それが欠けていけば、学者はまだ一人前の人間ではない。それが欠けていれば、思想が熟して真実になることは決してありえない」(CW 1: 94)と言った。「ひとり一人の個人に新たに付与された重要性」(113)を以て、「世間の改宗」(115)に当たることが「学者」の責務だ、というのが「アメリカの学者」の結論だった。

一八五一年に「逃亡奴隷法」の講演をしたとき、先の引用に見られるように、エマソンは奴隷制廃止運動への参加には、まだ気乗り薄だった。一八五二年七月二十八日付けのトマス・カーライル宛の手紙の中で、エマソンは、「この春、逃亡奴隷法に対する嫌悪感に駆られ、いくつか書き物と演説をしました。効果があるとの希望はなく、ただ自分に汚名を招くのを免れるためでした」(CCE 2: 231)と本音を語った。ところが一八五四年の「逃亡奴隷法」の講演では、「自

分の仕事を邪魔しそれから離れさせる」(CW II: 217)から、公の問題に対する発言はあまりしていないと断りながら、奴隷制の廃止に向かって持論を唱え、最後には、「反奴隷制協会に敬意を表」した。一八五五年の「アメリカの奴隷制」の講演では、「偉大な大衆と偉大な目的に向かって行動することは、とても心地よいことです」とまで言っている。まもなく南北戦争の火蓋が切つて落とされようとする一八六一年一月、ウエンデル・フィリップスから、奴隷制支持派と奴隷制反対派との激しい対立が続くポストンで開催される、マサチューセッツ反奴隷制協会の会合での講演を頼まれると、エマソンは「今日の義務を果たせ。今、思考する者すべての至上の公的義務は、自由を擁護することだ。自由が脅かされている所へ行つて、「私は自由を支持し、自由が消え去るより一瞬でも永く生きていたくはない」と言え」(JMN 15: 111)と、日誌に書き込んだのだった。

この間、奴隷制廃止運動を行う中流あるいは下層階級の人々に対する彼の意識が変化したことがうかがわれる。エマソンと同時代を生きた、ユニテリアン派の牧師オクテイヴィアス・ブルックス・フロシנגラムによれば、ユニテリアン派の牧師たちは、共同体の中では「特権階級」に属していたが、奴隷制廃止論者たちは、「貧しく、卑しく、蔑まれていた人々」であった(Howe 276)。また、先述したように、一八四〇年代、エマソンは奴隷制廃止運動の指導者たちをよく思っていなかった。彼は、一八五一年の「逃亡奴隷法」に見られるように、優れた道徳性を備えた(白人)指導者が、奴隷制廃止に向かって一般大衆を率いるという構図を思い描いていたのだろう。ところが、逃亡奴隷法制定時のポストンの富裕層が見せた、道徳性の欠如を

示す態度と同じ態度を、彼が指導層と期待する人たちも示したのだ。一八五四年の「逃亡奴隷法」では、「文学者たち、諸大学、教育ある者たち、さらには宗教家たちの破滅をまねく背信は、歴史における最も暗い一節であった」(CW II: 229)と言った。奴隷制廃止運動にかかわる中で、エマソンは運動の指導者たちや一般民衆の高い道徳性に、期待を寄せ始めたのではなからうか。だから、彼が「関係し関与している」「学者の階級」は、「ある程度全人類を含み、生涯の最良の時期におけるあらゆる人を含んでいる」(CW)とはいえ、「反奴隷制協会に敬意を表する」ともいえたのだ。さらに、一八五五年の「アメリカの奴隷制」における、「偉大な大衆と偉大な目的に向かつて行動することは、とても心地よい」という発言は、単なるリップ・サービスではなく、彼らとの連帯感が語らせた彼の本心であったろう。

おわりに

ローレンス・ビューエルが言ったように、エマソンの白人中心主義(ビューエルの言う「イギリス民族中心主義」)が、彼の反奴隷制思想とどの程度折り合っていたかは、にわかには決しがたい(95)。しかし、奴隷制廃止運動とかわる中で、彼が向かうべきは、上流の指導者層ではなく、中流あるいは下層階級であることを認識したのは確かだろう。一八五一年の連続講演を基にして、五〇年代を通して推敲し一八六〇年出版された「処世論」が、これまでの彼の著作と違って世俗的になったのは、彼らとの交流が影響したからかもしれない。

注

- (一) 『ペトルイオンの嘆息』 Petruionis, “Swelling That Great Tide: The Concord, Massachusetts, Female Anti-Slavery Society” 註文。

参考文献

- Buell, Lawrence. *Emerson*. Cambridge: Belknap, Harvard UP, 2003.
- Carlyle, Thomas, and Ralph Waldo Emerson. *The Correspondence of Thomas Carlyle and Ralph Waldo Emerson*. Vol. 2. Rev. ed. 1886. Rpt. [Whitefish]: Kessinger, [2006].
- Channing, William Ellery. *The Works of William E. Channing, D.D.* Vol. 2. New York: C.S. Francis, 1848.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Edward Waldo Emerson. 12 vols. 1903-04. Rpt. 2nd ed. New York: AMS, 1979.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Ed. William H. Gilman, et al. Cambridge: Belknap, Harvard UP, 1960-82. 16 vols.
- . *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson: 1843-1871*. Vol. 2. Ed. Ronald A. Bosco and Joel Myerson. Athens: U of Georgia P, 2001.
- Gougeon, Len. *Virtue's Hero: Emerson, Antislavery and Reform*. Athens: U of Georgia P, 1990.
- Howe, Daniel Walker. *The Unitarian Conscience: Harvard Moral Philosophy, 1805-1861*. Cambridge: Harvard UP, 1970.

Petruilonis, Sandra Harbert. " 'Swelling That Great Tide': The Concord, Massachusetts, Female Anti-Slavery Society." *New England Quarterly* 74 (2001): 385-418.

Thoreau, Henry David. *Journal*. Vol. 2: 1842-1848. Ed. Robert Sattelmeyer. Princeton: Princeton UP, 1984.